

樗里子甘茂列伝

	<p>樗里子は、名は疾、秦の恵王の弟なり。恵王と母を異にす。母は韓の女なり。樗里子は滑稽（酒器の名、転じて、よどみない弁舌で人を惑わし、笑わせること）にして智多し。秦人、号して智囊（チ・ノウ、囊は袋）と曰う。</p>
330	<p>秦の恵王八年、樗里子を右更に爵し、将として曲沃を伐たしむ。尽く其の人を出だして、其の城、地を取り、秦に入る。</p>
313	<p>秦の恵王二十五年、樗里子をして将と為し趙を伐たしめ、趙の將軍莊豹を虜にし藺を抜く。</p>
312	<p>明年、魏章を助けて楚を攻め、楚の将屈丐（カイ）を敗り、漢中の地を取る。秦、樗里子を封じ、号して嚴君と為す。</p>
311	<p>秦の恵王卒し、太子武王立つ。張儀・魏章を逐う。而して樗里子・甘茂を以て左右丞相と為す。秦、甘茂をして韓を攻めしめて、宜陽を抜く。樗里子をして車百乗を以て周に入らしむ。周、卒を以て之を迎う。意は甚だ敬う。楚王、怒りて周を讓む。其れ秦を重んずるを以てなり。客の游騰、周の為に楚王に説いて曰く、「智伯の仇猶（夷狄の国）を伐つや、之に広車を遣り、因りて之に随わしむるに兵を以てす（広車を送り、道を広げさせてから、兵を進める）。仇猶、遂に亡べり。何となれば、則ち備え無かりしが故なり。斉の桓公の蔡を伐つや、号して楚を誅すと曰い、其の実は蔡を襲う。今秦は虎狼の国なり。樗里子をして車百乗を以て周に入らしむ。周は仇猶・蔡を以て焉を觀る。故に長戟をして前に居らしめ、疆弩をして後ろに在らしめり。名は疾を衛ると曰えども、実は之を囚う。且つ夫れ周は豈に能く其の社稷を憂うる無からんや。一旦国を亡ぼし、以て大王を憂えしめんことを恐る。」楚王、乃ち悦ぶ。秦の武王卒し、昭王立つ。樗里子、又益々尊重せらる。</p>
306	<p>昭王元年、樗里子、将たりて蒲を伐つ。蒲の守、恐れて、胡衍に請う。胡衍、蒲の為に樗里子に謂いて曰く、「公の蒲を攻むるは、秦の為なるか、魏の為なるか。魏の為ならば則ち善し。秦の為ならば則ち頼（利なり）と為さず。夫れ衛の衛為る所以は、蒲を以てすればなり。今、蒲を伐たば、魏に入り、衛は必ず折れて之に従わん。魏、西河の外を亡くして、以て取る（取り返す）無きは、兵弱ければなり。今、衛を魏に并せば、魏、必ず疆からん。魏、疆きの日、西河の外は必ず危うからん。且つ秦王将に公の事を觀るに、秦に害し魏に利するを觀んとす。王、必ず公を罪せん。」樗里子曰く、「奈何せん。」胡衍曰く、「公、蒲を积（ゆるす）して攻むる勿かれ。臣、試みに公の為に入りて之を言い以て衛君に徳せん。」樗里子曰く、「善し。」胡衍、蒲に入り、其の守に謂いて曰く、「樗里子は蒲の病を知れり。其の言に曰う、必ず蒲を抜かん、と。衍、能く</p>

	<p>蒲を釈し攻むる勿らしめん。」蒲の守、恐れて、因りて再拝して曰く、「願わくは以て請わん。」因りて金三百斤を効して曰く、「秦の兵、苟（まことに）に退かば、請う、必ず子を衛君にに言いて、子をして南面（天子は南面することから、侯を指す）するを為さしめん。」故に胡衍、金を蒲より受け、以て自ら衛に貴しとす。是に於いて遂に蒲を解きて去る。還りて皮氏を撃つ。皮氏未だ降らずして、又去る。</p>
300	<p>昭王七年、樗里子卒す。渭南の章台の東に葬らる。曰く（遺言）、「後百歳にして、是れ当に天子の宮有りて我が墓を挟むべし。」樗里子疾の室は昭王の廟の西、渭南の陰郷の樗里に在り。故に俗に之を樗里子と謂う。漢、興るに至り、長樂宮は其の東に在り、未央宮は其の西に在り、武庫は正に其の墓に直（あたる）る。秦人の諺に曰く、「力は則ち任鄙、智は則ち樗里。」</p>
—	<p>甘茂は下蔡の人なり。下蔡の史挙先生に事え、百家の説を学ぶ。張儀、樗里子に因りて、求めて秦の恵王に見ゆ。王、見て之に説ぶ。将として魏章を佐けて、漢中の地を略定せしむ。恵王卒し、武王立つ。張儀・魏章去り、東のかた魏に之く。蜀侯の輝・相の壮、反す。秦、甘茂をして蜀を定めしむ。還りて甘茂を以て左丞相と為し、樗里子を以て右丞相と為す。</p>
308	<p>秦の武王三年、甘茂に謂いて曰く、「寡人、車を容れ（兵車を引き入れる）、三川（河水・洛水・伊水）を通じ（通り過ぎる）、周室を窺わんと欲す。而らば寡人死すとも朽ちじ。」甘茂曰く、「請う、魏に之き約し以て韓を伐たん。」而ち向壽をして輔行せしむ。甘茂至り、向壽に謂いて曰く、「子、歸りて、之を王に言いて、曰え、魏、臣に聴く。然りて願わくは王、伐つ勿れ、と。事成れば尽く以て子の功と為さん。」向壽、歸り以て王に告ぐ。王、甘茂を息壤に迎う。甘茂至る。王、其の故を問う。對えて曰く、「宜陽は大県なり。上黨・南陽は之に積むこと（食料を蓄える）久し。名は県と曰うも、其の実は郡なり。今王は数險（いくつかの険しいところ）に倍き、千里を行く。之を攻むるは難し。昔、曾參の費に処るや、魯人に曾參と姓名を同じくする者有りて、人を殺す。人、其の母に告げて曰く、「曾參、人を殺せり。」其の母織ること自若たり。頃之（しばらく）して、一人又之を告げて曰く、「曾參、人を殺せり。」其の母尚織ること自若たり。頃おいして、又一人之に告げて曰く、「曾參、人を殺せり。」其の母、杼（ジョ、ひ、機の横糸をおくるもの）を投じ機を下り、墻を踰えて走る。夫れ曾參の賢と其の母の之を信ずるとを以てしても、三人之を疑わば、其の母恐れぬ。今、臣の賢は曾參に若かず。王の臣を信ず</p>

ること、曾參の母の曾參を信ずるに如かず。臣を疑う者は特（ただ）だに三人のみに非ず。臣、大王の桴を投ずるを恐るるなり。始め張儀、西のかた巴・蜀の地を并せ、北のかた西河の外を開き、南のかた上庸を取りしが、天下は以て張子を多とせずして、以て先王を賢とせり。魏の文侯は楽羊をして将として中山を攻めしむ。三年して之を抜く。楽羊返りて功を論ず。文侯、之に謗書一篋（キョウ、はこ）を示す。楽羊、再拝稽首して曰く、『此れ臣の功に非ざるなり。主君の力なり。』今、臣は羈旅（キ・リョ、流れ者）の臣なり。樗里子・公孫奭（セキ）の二人の者、韓を挟みて之を議せば、王必ず之に聴かん。是れ、王、魏王を欺きて、臣は公仲侈の怨みを受くるなり。」王曰く、「寡人、聴かず。請う、子と盟わん。」卒に丞相甘茂をして兵を将いて宜陽を伐たしむ。五月にして抜かず。樗里子・公孫奭、果たして之を争う。武王、甘茂を召し、兵を罷めんと欲す。甘茂曰く、「息壤は彼（かしこ）に在り。」王曰く、「之に有り。」因りて大いに尽く兵を起し、甘茂をして之を撃たしめ、首を斬ること六万、遂に宜陽を抜く。韓の襄王、公仲子をして入りて謝せしめ、秦と平らぐ。武王、竟に周に至りて、周に卒す。其の弟立ちて昭王と為る。王の母宣太后は楚の女なり。楚の懐王、前に秦の楚を丹陽に敗りしに、韓、救わざるを怨む。乃ち兵を以て韓の雍氏を囲む。韓、公仲子をして急を秦に告げしむ。秦の昭王、新たに立ちて、太后は楚人にして、救うを肯ぜず。公仲、甘茂に因る。茂、韓の為に秦の昭王に言いて曰く、「公仲は方に秦の救いを得る有りとす。故に敢て楚を扞（カン、ふせぐ）ぐなり。今雍氏、囲まる。秦の師は殺（コウ）を下らず。公仲、且に首を仰ぎて朝せずして、公叔は且に国を以て南のかた楚に合せんとす。楚・韓、一と為らば、魏氏は敢て聴かざるをせず。然らば則ち秦を伐つの形成らん。識らず、座して伐たるを待つは、人を伐つの利と孰ぞ。」秦王曰く、「善し。」乃ち師を殺より下し、以て韓を救う。楚の兵去る。秦、向壽をして宜陽を平らげしめ、樗里子・甘茂をして魏の皮氏を伐たしむ。向壽は宣太后の外族なり。而して昭王と少きより相長ず。故に任用す。向壽、楚に如く。楚、秦の向壽を貴しとするを聞き、厚く向壽に事う。向壽、秦の為に宜陽を守り、将に以て韓を伐たんとす。韓の公仲、蘇代をして向壽に謂わしめて曰く、「禽も困しめば車を覆す。公、韓を破り、公仲を辱む。公仲、国を収め復た秦に事う。自ら以為らく、必ず以て封ぜらる可し、と。今、公、楚に解口の地を與え、小令尹を封ずるに杜陽を以てす。秦・楚合して、復た韓を攻めば、韓、必ず亡びん。韓、亡べば、公仲、且に躬（みずから）其の私徒を率い以て秦を闕（ふせぐ）がんとす。願わくは公、之を孰慮せよ。」向壽曰く、「吾、秦・楚を合する

は、以て韓に当たるに非ざるなり。子、壽の為に之を公仲に謁げて、秦・韓の交わりは合す可し、と曰え」蘇代對えて曰く、「願わくは公に謁ぐる事有らん、人曰く『其の貴き所以を貴ぶ者は貴し。』王の公を愛習（いつくしむ）するや、公孫奭に如かず。其の公を智能とするや、甘茂に如かず。今二人の者は、皆秦に親しみて事うるを得ずして、公独り王と断を国に主どるは何ぞや。彼は以て之を失えばなり（信賴をなくす）。公孫奭は韓に党して、甘茂は魏に党す。故に王、信ぜざるなり。今、秦・楚、疆を争う。而して公、楚に党するは、是、公孫奭・甘茂と道を同じくするなり。公、何を以てか之に異ならん。人は皆、楚の善く変ずるを言う。而して公は必ず之に亡びん。是れ自ら責めを為すなり。公、王と其の変を謀り、韓に善くし以て楚に備うるに如かず。此くの如くせば則ち患い無からん。韓氏、必ず先に国を以て公孫奭に従いて、而る後に国を甘茂に委ぬ。韓は公の讐なり（正義曰く、韓氏は必ず先ず二人に委ねん、故に韓は向壽の讐と為る）。今、公、韓に善くし以て楚に備えん、と言うは、是れ外挙には讐を辟けざるなり。（外部から人を登用する場合、その人が優秀であれば、仇であってもかまわない。）」向壽曰く、「然り。吾甚だ韓に合せんと欲す。」對えて曰く、「甘茂、公仲を許すに、部遂及び（原文は“反”であるが“及”に変える。）宜陽の民を以てす。今、公、徒に之を収めるは、甚だ難し。」向壽曰く、「然らば則ち奈何せん。武遂は終に得可からざるなり。」對えて曰く、「公、奚ぞ秦を以て韓の為に潁川を楚に求めざる。此れ韓の寄地なり。公、求めて之を得ば、是れ令、楚に行われて、其の地を以て韓に徳せん。公、求めて得ずば、是れ、韓・楚の怨みは解けずして、交々秦に走るなり。秦・楚、疆を争いて、公、徐に楚を過（せめる）め以て韓を収めん。此れ秦に利と為す。」向壽曰く、「奈何せん。」對えて曰く、「此れ善事なり。甘茂は魏を以て斉を取り、公孫奭は韓を以て斉を取らんと欲す。今、公は宜陽を取り以て功と為し、楚・韓を収め以て之を安んじて、斉・魏の罪を誅めよ。是れを以てせば公孫奭・甘茂事無からん（権威を失墜する）。」甘茂、竟に秦の昭王に言い、武遂を以て復た韓に帰す。向壽・公孫奭、之を争うも、得る能わず。向壽・公孫奭、此れに由り怨み、甘茂を讒す。茂、懼れて、魏の蒲阪を伐つを輟（テツ、やめる）め、亡げて去る。樗里子、魏と講じて兵を罷む。甘茂の秦を亡げて斉に奔るや、蘇代に逢う。代、斉の為に秦に使いせんとす。甘茂曰く、「臣、罪を秦に得て、懼れて遯逃（トン・チョウ、遯は逃げる）す。跡を容るる所無し。臣聞く、貧人の女、富人の女と会績（一緒に糸をつむぐ）し、貧人の女曰く、『我、以て燭を買う無し。而るに子の燭光は幸いに餘あり。子、我に餘光を分かつ可し。子の明を損ずる無

くして、一の斯の便を得ん（一は一緒に、便は使用）。』今、臣は困しみて、君方に秦に使いして道に当たらんとす。茂の妻子、焉に在り。願わくは君餘光を以て之を振（すくう）え。」蘇代、許諾す。遂に使いを秦に致す。已に因りて秦王に説きて曰く、「甘茂は常の士に非ざるなり。其れ秦に居りて累世重んぜられたり。殺塞自り鬼谷に至るに及ぶまで、其の地形の陰易（地勢の難易）は、皆明らかに之を知る。彼、斉を以て韓・魏に約し、反りて以て秦を凶らば、秦の利に非ざるなり。」秦王曰く、「然らば則ち奈何せん。」蘇代曰く、「王、其の贄（シ、にえ、人と会見するときに送る礼物）を重くし、禄を厚くし以て之を迎うるに若かず。彼をして来たらしめば則ち之を鬼谷に置いて、終身出だす勿れ。」秦王曰く、「善し。」即ち之に上卿を賜い、相印を以て之を斉より迎う。甘茂、往かず。蘇代、斉の湣王に謂いて曰く、「夫れ甘茂は賢人なり。今秦は之に上卿を賜い、相印を以て之を迎う。甘茂、王の賜に徳して、王の臣為るを好む。故に辞して往かず。今王は何を以て之に礼す。」斉王曰く、「善し。」即ち之に上卿を位して之を処（留めるの意）す。秦、因りて甘茂の家を復（税を免除すること）し、以て斉に市す（市は取引、斉との取引に便宜を凶ってもらう）。斉、甘茂を楚に使わす。楚の懐王、新たに秦と合婚（結婚）して驩ぶ。而して秦、甘茂の楚に在るを聞き、人をして楚王に謂わしめて曰く、「願わくは甘茂を秦に送れ。」楚王、范蠡（ケン）に問いて曰く、「寡人、相を秦に置かんと欲す。孰か可ならん。」對えて曰く、「臣、以て之を識るに足らず。」楚王曰く、「寡人、甘茂を相とせんと欲す。可なるか。」對えて曰く、「不可なり。夫れ史挙は下蔡の監門なり。（史挙は）大は君に事うるを為さず。小は家室を為めず。苟賤不廉（人格が卑小でいやしく、無慈悲である）を以て世に聞こゆ。甘茂は之に事えて、順なり。故に恵王の明、武王の察、張儀の弁に、甘茂、之に事う。十官を取りて（様々な官職に付く）罪無かりし。茂は誠に賢者なり。然れども秦に相とす可からず。夫れ秦に之れ賢相有るは、楚国の利に非ざるなり。且つ王は前に嘗て招滑を越に用いて、内に章義の難を行し、越国、乱る（招滑は楚から越に抜擢されて、越王に忠誠を誓う振りをして、章義をそそのかして越を乱した）。故に楚は南のかた厲門を塞ぎて、江東を郡とす。王の功を計るに、能く此くの如くせし所以の者は、越国乱れて楚治まればなり、今王は諸を楚に用うるを知りて、諸を秦に用うるを忘る。臣、以為らく、王、鉅（キョ、おおいに）いに過てり、と。然らば則ち王若し相を秦に置かんと欲さば、則ち向壽の若き者可なり（莫は削除）。夫れ向壽の秦王に親しむや、少くして之と衣を同じくし、長じて之と車を同じくし、以て事に聴く。王、必ず向壽を秦に相とせば、則ち

楚国の利なり。」是に於いて使いをして秦に請い、向壽を秦に相とせしむ。秦卒に向壽を相とす。而して甘茂、竟に復た秦に入るを得ず。魏に卒す。甘茂に孫有り、甘羅と曰う。

甘羅は甘茂の孫なり。茂、既に死し、後、甘羅年十二にして、秦の相文信侯呂不韋に事う。秦の始皇帝、剛成君蔡澤を燕に使わす。三年にして燕王喜、太子丹をして入りて秦に質たらしむ。秦、張唐をして往きて燕に相たらしめて、燕と共に趙を伐ち、以て河間の地を広げんと欲す。張唐、文信侯に謂いて曰く、「臣、嘗て秦の昭王の為に趙を伐ちし。趙、臣を怨みて曰く、『唐を得る者には百里の地を與う。』今、燕に之かば、必ず趙を経ん。臣、以て行く可からず。」文信侯は快からざるも、未だ以て疆いるに有らず。甘羅曰く、「君侯、不快の甚だしきは何ぞや。」文信侯曰く、「吾、剛成君蔡澤をして燕に事えしめて三年、燕の太子丹、已に入りて質たり。吾、自ら張唐に燕に相たるを請う。而るに行くを肯ぜず。」甘羅曰く、「臣請う、之を行らん。」文信侯叱して曰く、「去れ。我が身自ら之を請いて肯ぜず。汝焉んぞ能く之を行らん。」甘羅曰く、「夫れ項橐（タク）は生まれて七歳にして孔子の師と為る。今、臣は生まれて茲に十二歳なり。君其れ臣を試みよ。何遽（なんぞ）叱するや。」是に於いて甘羅、張卿に見えて曰く、「卿の功は武安君と孰ぞ。」卿曰く、「武安君は南のかた疆き楚を挫き、北のかた燕・趙を威し、戦えば勝ち攻むれば取り、城を破り邑を墮ち、其の数を知らず。臣の功は如かざるなり。」甘羅曰く、「應侯の秦に用いらるるや、文信侯の専ら（厚く信頼されること）と孰ぞ。」張卿曰く、「應侯は文信侯の専らに如かず。」甘羅曰く、「卿は明らかに其れ文信侯の専らに如かざるを知るか。」曰く、「之を知る。」甘羅曰く、「應侯、趙を攻めんと欲し、武安君、之を難しとし、咸陽を去ること七里にして、立ちどころに杜郵に死す。今文信侯自ら卿に燕に相たるを請う。而るに行くを肯ぜず。臣、卿の死する所の処を知らず。」張唐曰く、「請う、孺子に困りて行かん。」行を装治せしむ（旅の支度をさせる）。行するに日有り。甘羅、文信侯に謂いて曰く、「臣に車五乗を借せ。請う、張唐の為に先に趙に報ぜん。」文信侯乃ち入りて之を始皇に言いて曰く、「昔の甘茂の孫の甘羅は年少きのみ。然るに名家の子孫にして、諸侯皆之に聞けり。今、張唐は疾を称して行くを肯ぜざらんと欲し、甘羅説きて之を行る。今、先ず趙に報ぜんことを願えり。請う、許して之を遣らん。」始皇、召し見て、甘羅を趙に使わす。趙の襄王、甘羅を郊迎す。甘羅、趙王に説きて曰く、「燕の太子丹入りて秦に質たるを聞けるか。」曰く、「之を聞けり。」曰く、「張唐の燕に相たるを聞けるか。」曰く、「之

を聞けり。」「燕の太子丹、秦に入るは、燕は秦を欺かず。張唐、燕に相たるは、秦、燕を欺かず。燕・秦相欺かざるは、趙を伐たん。危うし。燕・秦相欺かざるに、異なる故無きは、趙を攻めて河間を広げんと欲すればなり。王、臣に五城を贖（セイ、もたらす）し、以て河間を広ぐるに如かず。請う、燕の太子を帰し、疆趙と與に弱燕を攻めん。」趙王、立ちどころに自ら五城を割き以て河間を広ぐ。秦、燕の太子を帰し、趙、燕を攻め、上谷の三十城を得て、秦をして十一を有せしむ。甘羅、還りて報ず。秦、乃ち甘羅を封じ以て上卿と為し、復た、始めの甘茂の田宅を以て之に賜う。

太史公曰く、「樗里子、骨肉を以て重んぜらる。固より其れ理なり。而して秦人は其の智を称す。故に頗る采る。甘茂、下蔡の閭閻（村里の門）より起こり、名を諸侯に顕わし、疆き齊・楚に重んぜらる。甘羅、年少し。然れども一の奇計を出だし、声（な）は後世に称せらる。篤行の君子に非ざると雖も、然れども亦た戦国の策士なり。方に秦の疆き時にして、天下尤も謀詐に趨るかな。」